

クエの資源動向と管理方策の検討について

長崎県総合水産試験場 漁業資源部 栽培漁業科

はじめに

クエの成長や放流技術に関する研究情報については以前にもご紹介してきたところです。今回は続編として、その後に得られた新たな知見や資源動向と併せ、今後この資源を持続的に利用していくための資源管理の必要性について見解を述べさせていただきます。

成長と成熟

本誌No.151では、「クエの年齢と成長について」と題し、一キログラムになるまで約三年、十キログラムに至るには十五年以上の歳月を要することをご説明いたしました(図1)。

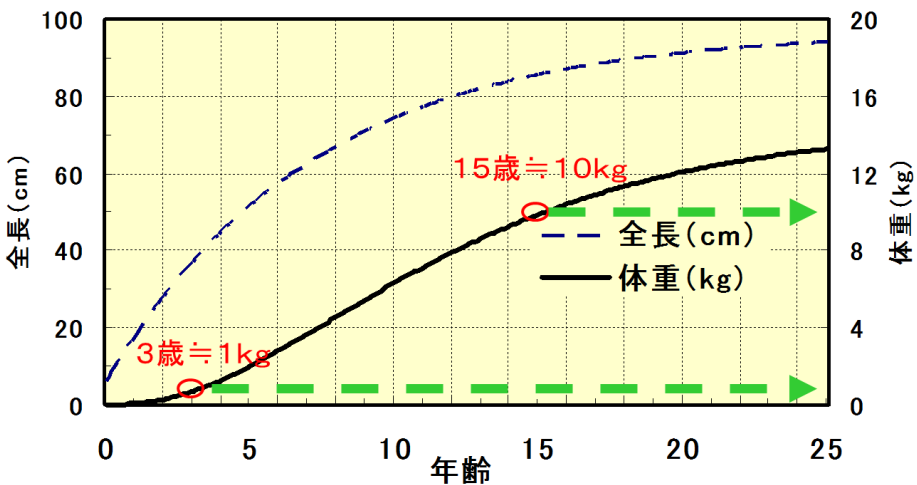


図1 長崎県産クエの年齢と成長

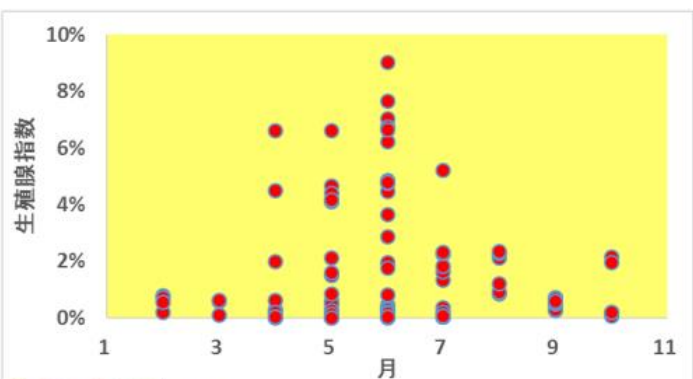


図2 生殖腺指数の月別推移



- ・6月が産卵盛期と考えられる。
- ・概ね7歳(3.5kg)魚から生殖腺重量が充実。

一般的には大型魚というイメージが強い本種ですが、ヒラメが二〜三年で、一〜二キログラムになるのに比較すると決して成長が速いという訳ではありません。

またクエでは、先に雌となりその後雄となる『雌性先熟』も特徴のひとつとして知られていますが、今回クエの産卵生態について調査しました。その結果、卵巣が最も大きくなるのは六月で、この時期が産卵の盛期と考えられました(図2)。

また、いろいろな魚体サイズでも測定した結果、体重が三・五キログラムを超える頃から卵巣が急激に大きくなる傾向がわかり、産卵の本格的な開始がこの頃になるのではないかと推測

されました。

漁獲量の推移と漁獲物組成

クエの漁獲量に関しては既存の統計資料がないため、県内の各漁協等に協力をいただきその把握に努めました。その結果、長崎県の漁獲量は図3のように近年は増加傾向が見られ、平成二十八年は前年比一・五倍の急激な増加に至ったと考えられました。

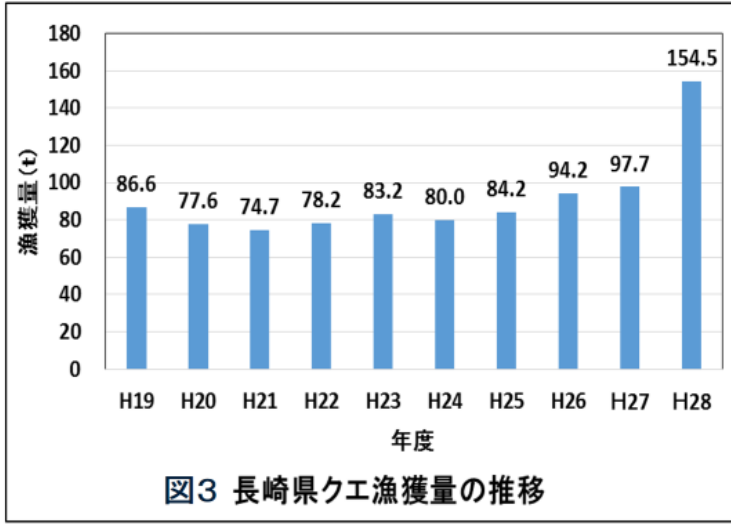


図3 長崎県クエ漁獲量の推移

この図を見る限りでは好調な漁獲が継続され資源状況も好転しているように感じられます。ところが、杵岐・対馬や県北地区における漁獲物の体重組成について、平成二十二年と二十六年を比較したところ、未成魚と考えられる三キロ未満の割合は、五十四%から七十四%に増大していることがわかりました(図4)。

このような漁獲が継続され続けると、いずれ再生産が行き詰まり、資源水準が急激に低下することが懸念されます。

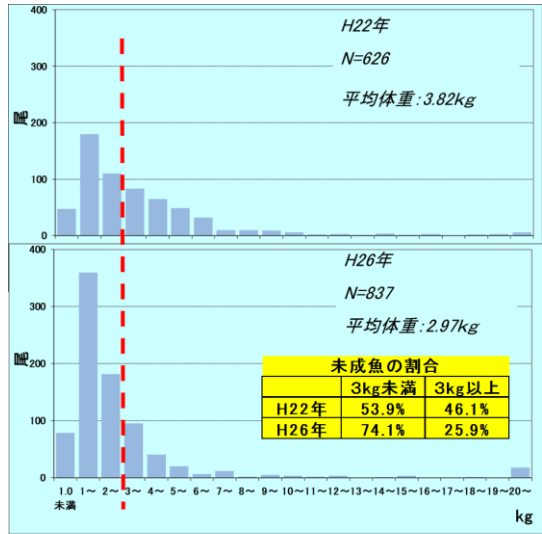


図4 福岡魚市における体重組成調査結果

持続的な生産体制へ向けた取組

既に様々な魚種において持続的な資源利用を図るための管理措置が取り組まれています。本県海域のクエ資源についてもこのような状況を考慮すると早急な対応が望まれるところで、既に県内の一部地域において、関係者による漁業者連絡協議会等の設置と併せ、漁獲の時期やサイズ、漁具数や餌の使用を制限することで、漁獲努力量の調整を実施している先進的な事例も見られています。

当然のことですが、持続的な資源利用を図るためには、さらに県下全域でこのような管理体制の整備と地域的な漁獲の実態に見合った管理方針の検討を各海域で取り組んでいただきたいと考えています。

長崎県では、クエ漁業の盛んな外海域を対象として関係海域代表者の参画による協議会活動を平成二十六年から展開し、資源管理についての情報交換等を進めており、関係漁業者の意見を反映した取組が具現化されることが期待されています。

おわりに

全国的な統計が整備されていないことから正確なところはわかりませんが、クエの漁獲量に関しては、おそらく全国第一位であろうと推察されます。この資源利用に関しては、県内船が増加傾向にあり、また県外船や遊漁の利用もみられることから、今後さらに漁獲圧が増大すると考えられます。

今回ご紹介した内容に関係者各位にご理解いただき、地域ぐるみで『獲り残し策』を検討していただきたいと思います。

(担当 戸澤隆)